

五浦の天心 挑戦の系譜

「没後100年展」県近代美術館

明治の思想家、岡倉天心(1863-1913年、本名・寛三)の「五浦時代」に光を当てた「岡倉天心没後100年記念展 天心の思い描いたものーぼかしの彼方へ」が、水戸市千波町の県近代美術館で開かれている。天心の薫陶を受け、時代を超えた絵画の創造を目指し、本県・五浦で研さんを積んだ横山大観ら弟子4人の作品を展示。彼らが挑んだ表現の象徴「ぼかし」を切り口に、天心が思い描いた美術を再考する。

大観、下村観山、菱田春草、木村武山の4人は五浦に移る前から、東京美術学校や日本美術院で天心の導きにより、新時代の絵画を探索していた。大観、春草が中心となって試みたのが色彩とグラデーションによる新表現。日本絵画の伝統とされてきた線描を用いず、輪郭線のない色面を連続させ、色彩のじみとぼかしによって構成させる手法だった。

だが、大観らの試みは日本画とも西洋画ともつかない「朦朧体」と酷評を受け、天心は1906(明治

39)年、経営が行き詰まった日本美術院の絵画部を五浦に移転し、大観らと再起を図る。隔絶された地で厳しい研さんを積み、「朦朧体」は洗練、空寂や距離感を見事に捉えた色面表現へと進化を遂げた。

本展は県の「震災復興祈念」天心・波山記念事業の一環として、大観の最後を飾る企画展。2部構成となっている。

第1部は、同館および各美術館の所蔵品から大観ら4人の作品を紹介。巨匠と呼ばれる以前の若い時代を軸に、天心没後までの展開を振り返る。

同館の井野功一学芸員は「天心が訴えたのは、日本の伝統だけでなく、西洋の模倣でもなく、両者の折衷でもない。それらを超越する、時代に即した絵画の創出だった。厳しい時代の4人の作品を通して、天心が思い描いた美術を感じてほしい」と話す。

展示されているのは大観「流燈」や「或る日の太平洋」、観山「大原之露」、春草「落葉」、武山「阿房劫火」など47点。大観の「或る日の太平洋」は、老巨匠となった84歳の作品。富士は画面上方



横山大観「或る日の太平洋」1905年、東京国立近代美術館蔵

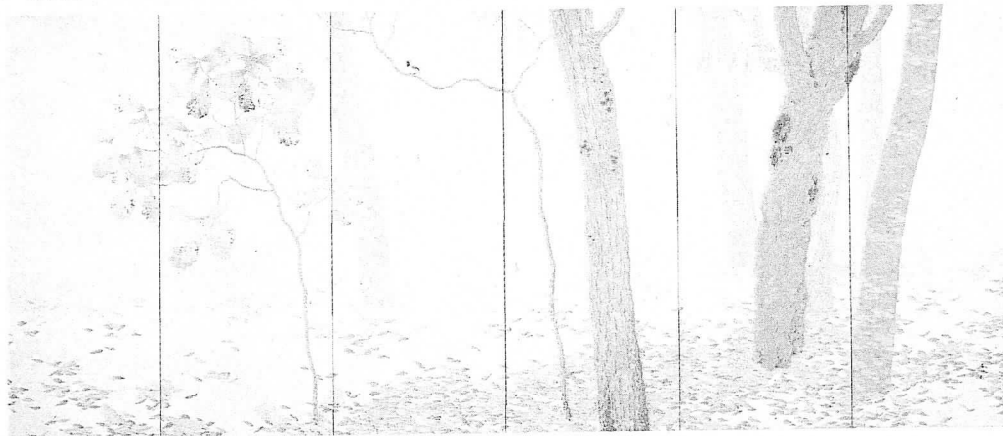
大観ら時代超えた表現

に配され、その下には荒れ狂う太平洋の波に風と稲妻が交じる。その中に描き込まれた電は、自然をつかさどる神秘的な存在感を醸し出している。

春草の「落葉」は、病のため五浦を離れて東京・代々木で療養していた時に、近くの雑木林を描いたもの。画家として行動を共にしていた大観と初めて距離を置き、1人で身近な自然に接した経験が臨場感を際

立たせている。第2部は、天心の思想を受け継ぐ、現代の作家たちの作品を紹介。再誕日本美術院展に設けられた「天心記念茨城賞」の近年の受賞作品を一堂に集め、「ぼかし」をキーワードに、新旧作家の対照を見ることができ

る。会期は3月21日まで。問い合わせは同館☎029(243)5111。(沢畑浩二)



菱田春草「落葉」(右隻)=1909年、福井県立美術館蔵